

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	京都大学	拠点番号	A 1 4
申請分野	生命科学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	生物多様性研究の統合のための拠点形成 Formation of a strategic base for the multidisciplinary study of biodiversity		
研究分野及びキーワード	<研究分野: 基礎生物学> (多様性) (発生遺伝) (進化遺伝) (霊長類学) (生態系)		
専攻等名	理学研究科生物科学専攻 霊長類研究所 生態学研究センター		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 佐藤 矩行 教授 他 23 名		

拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について></p> <p>本拠点がカバーする学問分野は、生態学、系統学、行動学、生理学、遺伝学、発生生物学、分子生物学、ゲノム科学、霊長類学、人類学など基礎生物学の全分野を含むものである。</p> <p>本拠点の重要性：生物多様性の喪失は、現代社会がかかえる最大の難題である。本拠点は、日本における唯一の生物多様性を統一的に研究する場を形成している。</p>
<p><本拠点の特色及びその目的等></p> <p>本拠点は、わが国では唯一、マクロの生物学とミクロの生物学を統合した「生物多様性科学」を創出するところに特色がある。生物多様性はこの地球のもつ豊かさである。また大脳化というヒトの進化特徴を推進した最も重要な要素の1つであり、人類の生活と文化を成り立たせるための必須条件でもある。したがって、人類の未来は生物多様性の維持機構を解明し、それにどう対処するかにかかっているといても過言ではない。</p>
<p><COEを目指すユニーク性></p> <p>生物多様性のマクロ生物学およびミクロ的生物学研究は、国の内外を問わず活発に行われている。しかしそれらはいずれも単発的なものであり、両者を統合し生物多様性の全体像を掴もうとする動きはほとんど見られない。本COE拠点は本学3部局に所属するミクロ・マクロのそれぞれ約10名の研究者を総動員し、多様性の統合研究をめざすユニークなもので、世界的にも例をみない。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性></p> <p>上に述べたように、生物多様性をどのように解明し理解していくのかは、現代社会がもつ最も緊急かつ重要な学問的かつ社会的課題である。本COEはそうした緊急の要求に応えるべく研究の展開と将来の人材の育成をめざすもので、極めて重要である。また、生物多様性の統合的研究で大きな発展が期待できる。</p>
<p><本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果></p> <p>本プログラムが始まって以来、マクロ研究者はよりミクロ的研究手法の導入を、ミクロ研究者はよりマクロ的研究への指向が強まっている。また相方の研究者が顔を合わせることが多くなり、両者の交流が飛躍的に高まった。マクロとミクロの双方の分野に興味をもつ院生が増え、近い将来学際的な研究、幅の広い研究が増えると期待できる。生物多様性を個別的な学問領域ごとにとらえるのではなく、ミクロからマクロまでの学際的に包括的に研究する枠組みが形成されることが期待され、多様性の保全をテーマとする新しいタイプの研究者を輩出する教育体制が確立すると期待できる。</p>
<p><背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等></p> <p>生物多様性を分子レベルから理解するには、新しい遺伝子の生成という「ハード」の視点だけではなく、既知の遺伝子をどう利用したかという「ソフト」の視点が重要であることがますます明らかになってきている。ミクロの植物学分野においても自然変異や多様性に対する関心が高まりより先駆的な研究が出始めている。生物多様性についての関心は、本プログラムによる活動を通じて、より社会一般の関心をひくようになってきている。また、海外の環境破壊がすすむアフリカ及び東南アジア地域において保全にとりくむ研究・教育拠点がつくられ、それによって、市民レベルの保護のとりにくみをアピールする効果が期待できる。</p>

機 関 名	京都大学	拠点番号	A 1 4
拠点のプログラム名称	生物多様性研究の統合のための拠点形成		

21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と評価される。

(コメント)

「生物多様性研究」は時宜をえたプログラムではあるが、ミクロとマクロ、実験と理論を統合した新しい学問の展開には、両面からのアプローチができる新しいタイプの研究者が生まれることが必要であろう。その点で、統合した講義の設定やインターラボの構築の成果を期待したい。研究面でも、マクロとミクロの乖離を埋める努力が認められるので、拠点形成へ向けて進んでいると評価できる。